「しか」の意味—「だけ」との関連から

趙　愛淑

キーワード：自者肯定、他者否定、明示的意味、暗示的意味、期待

0.はじめに

とりたて詞「だけ」と「しか」はいずれも限定を表す語として、これまで構文的側面、意味的な側面から研究が行われてきた。

(1) 研究会に太郎だけ来た。

(2) 研究会に太郎しか来なかった。

(3) a. 研究会に太郎が来た。

　　b. 研究会に太郎以外が来なかった。

例(1)(2)は、ニュアンスの相違はあるものの、ともに(3a,b)の意味をなしており、「だけ」と「しか」の文が表す意味の真偽値は同じである。そういう意味で「だけ」と「しか」は、ある文脈においては同じ機能を果たしていると言える。また、「だけ」と「しか」がとりたてる要素「太郎」と、対比される要素「太郎以外」の関係は、一方が「来た」、他方が「来なかった」という肯定と否定の意味的な対立関係をなしている。本稿では、このような意味的な働きを「限定のとりたて」と呼ぶことにする。

しかし、「だけ」と「しか」によって生じる意味の現れ方には異なった様相が見られる。

例えば、(1)(2)で読みとれる「太郎が来た」という意味は、(1)では、「だけ」の付加にかかわらず、既に成立している意味であるが、(2)では「しか」の付加によって生じる意味である。つまり、(1)(2)でそれぞれのとりたて詞を取り除いた(4)(5)の文を見ると、「しか」の場合、「太郎が来た」という意味はとれない。

(4) 研究会に太郎が来た。((1)からダケをとった文)

(5) 研究会に太郎が来なかった。((2)からシカをとった文)

これは「だけ」と異なって、否定表現と呼応するという「しか」の構文的制限が、その意味特性に何らかの影響を及ぼしていることに起因すると考えられる。

また、両者は(1)(2)とは異なって、文法的にどちらかしか言えない例もみられる。

(6) a. 誰も来ないと思っていたのに、太郎だけが現れた。

b.*誰も来ないと思っていたのに、太郎しか現れなかった。

(6)は、「太郎が来た」という事柄が「誰も来ないだろう」という前提と反する場合「しか」は不適切な文となる。このような違いについて、従来「しか」には、「だけ」とは異なって、発話された事柄に対する一種の「期待」[1]があると説明されてきた。

本稿では、意味論的な観点[2]から「だけ」と「しか」の表す本質的な意味を論じること（2 節）と、「しか」が持つとされる「期待」という概念を具体的に論じること（3 節）を目的とする。

1. 先行研究及び問題の所在

「だけ」と「しか」の違いに関して、寺村(1991)、沼田(1993)は次のように記述している。

1.1. 寺村(1991)

(7) 「X ダケ P」という文は、<X について P である>という意味を表の意味とし、<X 以外のものについて P でない>という意味を影の意味として含む。これに対し、「X シカ P ナイ」はその逆で、<X 以外について P でない>のほうを表の意味とする。これが両者の基本的違いである。(pp.164-165)

(8) 「X シカ P ナイ」は、「X について P である」コトを伝えると同時に、「(当然そのように予想された) ～X について P でない」という影を暗示する言い方である。(pp.145)

寺村(1991)では、「だけ」と「しか」の違いを、両者による「表の意味」[3]と「影の意味」の違いで求めているが、(7)(8)の記述から判断すると「しか」において「X が P する」「X 以外が P しない」という二つの意味の中で、どちらが「表の意味」、あるいは「影の意味」なのか、判

断しがたい[4]。

1.2. 沼田(1993)[5]。

(9) 「だけ」主張・断定・自者肯定　かつ　含み・断定・他者否定

(10)「しか」主張・断定・自者否定　かつ　含み・断定・他者肯定
予想・自者否定[6]
他者否定　(p.43)

沼田(1993)の記述では、「だけ」と「しか」の違いを、「含み」として「予想」を持つか否かに求めている。ただし、(9)(10)で見られる「だけ」と「しか」の主張、含みの相違は、「とりたて詞の自者に対する肯定か否定かの判断は、当該のとりたて詞文からそのとりたて詞を除いた文を基に考える。そこで、「しか」の場合だけは常に自者否定の主張となる」(沼田 1993:43)という沼田の立場によるものである。例えば、上記の(1)(2)で考えると、「だけ」と「しか」の意味記述は次の<表 1>のようになる。

<表 1>

「だけ」と「しか」の意味		太郎だけ来る	太郎しか来ない
		太郎が来る	太郎が来ない
主張	太郎が来る	自者肯定	自者否定
含み	太郎以外が来ない	他者否定	他者肯定

つまり、沼田(1993)での自者と他者における肯定か否定かの判断は、当該文から「だけ」と「しか」を取り除いた文の述語と、両者における「主張」と「含み」とが形態的にも、意味的にも同じであれば「肯定」になり、異なっていれば「否定」になる。

このような記述から、沼田(1993)では、「予想」の有無を取り除くと、「だけ」と「しか」は、文の解釈上、基本的に違いはないとしている。

1.3. 問題の所在

とりたて詞による二重の意味構造は、従来「コト的意味・影(の意味)」(寺村 1986)[7]、「主張・含み」(沼田 1986)[8]などの概念で呼ばれている。これらの用語は異なっているものの、指している意味内容は同様であると思われる。つまり、「コト的意味」「主張」はとりたて詞の存在と関係なく、文中で既に表れている情報に関する意味を示しており、「影(の意味)」「含み」

は文中には示されていないがとりたて詞が付加されることによって「文外に暗示」（寺村 1986）、「暗示的主張」（沼田 1986）される意味であると理解される。本稿では用語の紛らわしさを避けるため、前者を「明示的意味」とし、後者を「暗示的意味」と名付けることにする。

このようなとりたて詞による二重の意味と、「だけ」「しか」に関する先行研究での記述を比較してまとめると、以下の＜表 2＞のようになる。

＜表 2＞

	だけ		しか		
	寺村(1991)	沼田(1993)	寺村(1991)		沼田(1993)
明示的意味	XがPする	XがPする	XがPする	X以外がPしない	XがPする
暗示的意味	X以外がPしない	X以外がPしない	X以外がPしない	XがPする	X以外がPしない

＜表 2＞から分かるように、先行研究の記述において、「だけ」の場合はその見解が一致しているが、「しか」の場合は相異が見られる。

しかしながら、「しか」の場合、両者の定義からは「しか」が表す「X が P する」「X 以外 P しない」のどちらの意味も「文外に暗示」（寺村 1986）、「暗示的主張」（沼田 1986）であるとは言い切れないと思われる。

つまり、従来の定義から考えると、「コト的意味」「主張」はとりたて詞文から当該のとりたて詞を取り除いた「客観的な事柄」（寺村 1986）、「それがない文」（沼田 1986）と説明されている。しかし、「太郎しか来なかった」という文から取れる「太郎が来た」「太郎以外が来なかった」の意味は、どちらも当該文から「しか」を取り除いた結果得られるものではない。よって、従来の定義からはどの意味が「しか」による明示的意味か、あるいは暗示的意味かへの判断は出来ない。

そこで本稿では、「しか」における明示的意味と暗示的意味について再検討し、「だけ」と「しか」の本質的な意味について新たな分析を試みる。

2. 「だけ」と「しか」の意味―「明示的意味」と「暗示的意味」

「だけ」と「しか」は「X が P する」と「X 以外が P しない」という意味を表している点では一致する。しかし、２つの意味が生じるプロセスは「だけ」と「しか」によって異なっていると思われる。

まず、「だけ」と「しか」による「X が P する」「X 以外が P しない」の意味と、実際に文中

に明示されている要素との関係を見ると、次の<表 3>のようである。

<表 3>

「だけ」と「しか」の意味	だけ		しか	
	X	P	X	P
XがPする	**明示**	**明示**	**明示**	暗示
X以外がPしない	暗示	暗示	暗示	**明示**

つまり、「だけ」「しか」はいずれも、「X」が明示されているが、それと結びつく要素「Pする」は「だけ」と「しか」によって対立が見られる。この対立が「だけ」「しか」の意味にどのように反映しているのかを考えたい。例えば、

(11)　あの食堂はいつ休むの？

a. 月曜日だけ。／月曜日だけ休む。　　b. *月曜日しか。／月曜日しか休まない。

(12)　学校へ行かないのはいつ？

a. 週末だけ。／週末だけ行かない。　　b.*週末しか。／*週末しか行かない。
／週末しか行かない日はない。

(13)a.　見ているだけ。／見ているだけだ。　(13)b.*見ているしか。／見ているしかない。

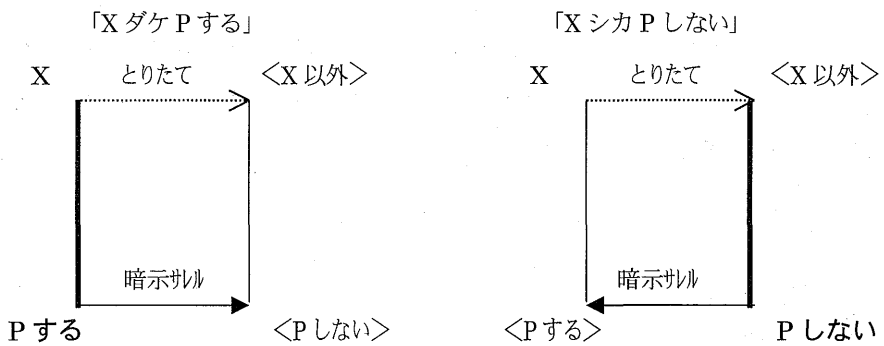
(11)～(13)の例から見られる「だけ」と「しか」の構文的な相違は、後接要素の制限とその要素の省略有無である。つまり、「だけ」は「Pする」「Pしない」の両方の後接も、かつ、その省略もできる。しかし、「しか」は「Pしない」しか後接できず、その省略もできない。

このような「だけ」に見られる「後接要素の省略可能」という現象、つまり、「Xだけ」のみでも「XがPする」「X以外がPしない」の二つの意味が生じることから、「だけ」は述部の表す事柄の「Pする」「Pしない」の有無と関わらず、述部で述べられた事柄に該当するのは「X」であって、「X以外」ではないということを表している。すなわち、述語が肯定、否定のどの形式で現れても、述部で述べられている事柄を「肯定」する役割しか持っていないと考えられる。よって、「だけ」における（自者）肯定、（他者）否定の意味は、「Pする」「Pしない」の省略有無とは関係なく成り立つと考えられる。

それに対して、「しか」における「否定表現と共起する制限」つまり、「後接要素の省略不可能」という現象から、「X以外がPしない」の意味における「肯定」[9]の役割は「しか」によるものではなく、後接する「Pしない」によるものと考えられる。つまり、「しか」は自者をとり

たてることによって他者を想定させ、その他者を「しか」とセットとなる「P しない」と結び付ける役割を持っていると見なされる。そこから「X 以外が P しない」という意味が生じ、さらに、その結果「X が P する」の意味が浮かび上がると思われる。

このことから、「だけ」と「しか」による「X が P する」「X 以外が P しない」の意味の生成プロセスを以下のように考える。（下の図で、＜＞で囲んでいる要素は暗示される要素を指す）



「だけ」と「しか」はいずれも自者をとりたてて（点線）、他者を想定させる働きを持っている。しかし、「だけ」は自者をとりたてて、その自者について述べている（太線）のに対して、「しか」は自者をとりたてていながら、他者について述べている（太線）。すなわち、意味的に、「だけ」は自者の方に、「しか」は他者を述べることに重点が置かれていると考えられる[10]。その結果、「だけ」は「X 以外が P しない」という意味が暗示され、「しか」は「X が P する」という意味が暗示されると考えられる。

言い換えれば、「だけ」「しか」の場合、いずれも自者をとりたてはいるが、「だけ」が直接とりたてる要素について述べているのに対して、「しか」は対比される要素について述べている点で両者は異なっている。

以上のように本稿では、「だけ」「しか」によって語られている対象に関する意味を明示的意味とし、それによって生じる意味を暗示的意味と考え、「だけ」と「しか」の意味の違いを次のように示す。

(14)

	だけ	しか
明示的意味	X が P する	X 以外が P しない
暗示的意味	X 以外が P しない	X が P する

3. 「だけ」と「しか」における「期待」

「だけ」と「しか」の意味的相異については、既に多くの先行研究において、「期待」という観点から説明されている[11]。本節では、「期待」とは具体的に何を示すものなのか、またどこから生成されるものなのかという点について、現実世界との関連から考える(3.1.)。それを踏まえた上で、期待される対象について確認し(3.2.)、自者と他者との間に見られる序列関係について述べることにする (3.3.)。

3.1. 現実世界と期待

「しか」には発話以前から「期待」されるものがあるということが指摘されている。例えば、山中(1993)では、「しか～ない」を用いる目的について、「話し手の信念世界においてある成立した事柄を量化して捕え、成立以前に話し手が期待・予測していた値に満たなかったことを表示」(p.86)と記述している。このような「しか」に関する指摘は、以下の例からも理解される。

(15)a. 助けたかったのに、見ているしかなかった。

b. 助けたかったのに、見ているだけだった。

(16)a. 助けようとは思わなかったので、見ているだけだった。

b.*助けようとは思わなかったので、見ているしかなかった。

(17)「まあ、ご旅行？いいわね、自由業の方はふつうの日に旅行ができて、私なんか日曜日しかできないのよ」(松原惇子(1990)「女が家を買うとき」文春文庫、p.25)

(18) こちらの気持ちに気づかず玉ねぎの話ばかりしている大津。ゴルフと新型の車しか話題がない夫と同じように退屈だが、大学時代の友人や矢野たちとはまったく対照的な男。(遠藤周作(1997)「深い河」講談社文庫、p.110)

(15)(16)を見ると、(15)のように「助けたい」という期待が前提とされている場合は、「しか」「だけ」の両方とも自然になるが、(16)のように文脈上、助けることに対する期待がない場合、「しか」は不自然となる。すなわち、「だけ」は期待の有無にかかわらず成立するのに対して、「しか」は何かに対する期待がなければならない。これは(17)(18)のような「しか」の実例からも確認できる。(17)(18)はそれぞれ「旅行に行ける日」、「夫との話題」について自者「日曜日」、

「ゴルフと新型の車」よりは、他者「ふつうの日」、「ゴルフと新型の車以外」の方が期待されていると解釈される。よって、期待の概念が「だけ」においては任意的であるが、「しか」は必須的であるということが「だけ」と「しか」の相違点であると言える[12]。

しかしながら、以下の「しか」の例において、「成立した事柄」より、成立以前に「期待・予測していた」何かが感じられない、あるいは、発話以前から期待があったか否か判断できない場合も見られる。

(19) 別のスーパーでは「口に入るものを売る我々は、安心を売る商売。白か黒しかない。店頭に出すものにグレーは許されない」と厳しい表情で語る。(朝日朝刊 990226)

(19)は「白か黒はあるが、白と黒以外はない」という意味で解釈される。しかし、文脈から、「口に入るものを売る商売で店頭に出すもの」として自者「白か黒」の他に何かを期待していたとは考えられない。つまり、(19)は、存在するのは自者「白か黒」のみで、他者である「白か黒以外」は存在しないという限定の意味を表す例で、自者以外に関する期待が想定しにくい文脈である。従って、「しか」は必ずしも発話以前に自者以外を期待している場合にのみ成立する、というわけではない。

このような現実世界における期待の有無に関係なく言語的に「しか」が現れる現象を、「しか」の持つ機能、つまり、他者を想定し、それを否定する働きと関連づけて考えてみる。

(19)の場合、実際には自者「白か黒」以外に期待している要素はない。しかし、「しか」を使うことによって、他者「白か黒以外」を想定させ、それを否定する。その結果、残された自者が唯一の要素であるという読みを作り出すのだと考えられる。すなわち、「白か黒」以外に他のものがないにもかかわらず、「しか」で表すことによって「白か黒以外」すなわち他者が存在するという期待を持たせ、それを否定することで残された唯一の要素として自者「白か黒」を取り上げていると解釈される。つまり、期待というのは「しか」が発話されることによってはじめて生じるものである。従って、「しか」は自者以外に期待を持たせる働きを持つと考えられる。

3.2. 期待の対象

「しか」において具体的にどの要素が期待されるのか、その対象について考えることにする。例えば、

(20)　みんなに来てほしかったのに、太郎しか来なかった。

(21)* 誰も来てほしくなかったのに、太郎しか現れなかった。

(22)a. 男の子しか来なかった。

b. ＜男の子と女の子に来てほしかったのに＞

c. ＜男の子は来てほしくなく、女の子は来てほしかったのに＞

(23)* 家に母一人居てほしかったのに、帰ってみたら母しか居なかった。

(20)(21)の文法性の相違から、(20)のように自者と他者を含めたすべての人間に対して「来る」という期待がある場合は、「しか」が許容されるが、(21)のように自者と他者に関する期待が文脈上否定されている場合は「しか」は許容されないことが分かる。また、(22a)は、(22b)(22c)のような両方の期待が考えられる。ただし、両方とも他者「女の子」について「来る」という期待は読みとれるが、自者「男の子」が「来る」「来ない」ことへの期待は中立的であると思われる。従って、(20)～(22)の例から、「しか」における期待とは、他者に関しては必須的であるが、自者に関しては任意的であると考えられる[13]。このことは、(23)のように「家にいる人物」に対して、他者「母以外」でない、自者「母」のみを期待し、それが成立した場合には「しか」が許容されないことからも裏付けられる。

3.3. 期待される対象と実現される対象の序列関係

期待される要素ととりたてる要素との間にはある序列[14]が見られる。例えば、次の例は期待される要素があるにもかかわらず、文法性の相違がある。

(24)a.　社長になりたかったのに、課長にしかなれなかった。

b.* 課長になりたかったのに、社長にしかなれなかった。

(25)a.　500 円がほしかったのに、100 円しかもらえなかった。

b. * 100 円がほしかったのに、500 円しかもらえなかった。

つまり、(24a)(25a)のように自者「課長」「100 円」に比べ、他者「社長」「500 円」の序列や程度が大きな場合には許容されるが、(24b)(25b)のようにその逆の場合には許容できない。このような現象から、自者と他者の間に文脈上、ある序列、程度が与えられている場合、その序列、程度とは自者より他者が大きくなければならないということが言える[15]。

その序列とは、発話者が想定していることを表している。例えば(26a)の文は、「会社での役職」を想定すると(26b)の解釈となるが、会社での役職以外の序列――例えば、「知識の量」などの序列を想定した場合、(26c)のような解釈も可能となる。

(26)a. 彼は社長でしかない。

b. ＜彼には会長になってほしかったのに、あるいは、会長の方がもっと上なのに＞

c. ＜彼には大学の先生になってほしかったのに、あるいは、大学の先生の方がもっといいのに＞

また、次の(27)の例では、「今すぐに使用できる便利さ」のような序列において、自者「500円玉」は、他者「100円玉」より下位になるということである。

(27) （自販機で飲み物を買うため）100円玉がほしいのに、500円玉しかなかった。

これは、(25b)に比べると、自者より他者が少額であるため非文となる、ということではない。(25b)(27)の文法性の相違は、自者と他者の間に数量の大小という序列しか想定できないか（(25b)）、別の序列が想定できるか（(27)）による。つまり、自者と他者との序列関係は一般的な知識を基にした絶対的な序列で決まるものではなく、文脈に左右されるものであり、「しか」でとりたてることによって、発話者が他者への期待を示していると考えられる。すなわち「しか」を使用することによって、発話者は自らが想定する序列に基づいて、他者を自者よりも上位に置いている、ということである。

最後に、「しか」における「自者より他者に期待がある」ことを示す働きから、従来の「しか」の意味に関する「期待や予測に満たない」（山中(1993:80)）、「期待はずれ的主観評価」（中西(1995:322)）という指摘や、特に動詞に後接した場合の「最後の手段」（佐藤(1986:17)）という意味合いを具体的に説明できると思われる。

すなわち、ある集合の要素の中で対比される他者を否定することによって残されるのは、とりたてられる自者となる。しかし、期待される対象はとりたてる要素以外、つまり他者にあり、それを否定することによって、唯一残されたのは期待されていない自者となる。従って、期待されていないものが残されることから「残念だ」などという読みが、また、唯一残された自者に対して「最後の手段」という読みが生じるのだと考えられる。

例えば、(28)は「勉強すること」より、他に期待される「勉強すること以外」という他者を

想定し、それを否定することによって、「勉強すること」が唯一残された事柄であるという意味で「最後の手段」、あるいは「残念だ」という読みが生じると思われる。

しかしながら、(29)(30)をみると、「しか」が示す出来事が必ずしも否定的な評価を伴うものであるとは言い切れないと思われる。

(28)　勉強するしかない。

(29)a. 今度の事故では3人しか死ななかった。

b. ＜全員が死ぬかと思ったのに＞

c. ＜あんなに大きな事故だったが、幸い＞

(30)a. 20人が入試を受けて、2人しか落ちなかった。

b. ＜少数の人を取ろうと思っていたのに＞

c. ＜厳しい試験だったが、幸いうちの生徒は＞

(29)(30)は言語的には「しか」を使用することによって、「3人以上の死亡者」「2人以上の不合格者」を期待していたこととなる。しかし、(29b)の解釈であれば「死ぬかもしれない人の数」という序列において、他者「全員」が自者「3人」より上位であるし、(29c)の解釈であれば、「(事故の悲惨さから) 予想される死亡者」という序列において、他者「3人以上」も死んでいるはずだ、という点で自者より他者の方が上位となる。(30)についても同様のことが言える。つまり、想定された序列において他者は自者より上位であるが、必ずしも「残念だ」という否定的なニュアンスを伴うわけではない、ということである。すなわち「しか」の表す期待というのは、文脈によって語用論的に様々な解釈が生じうると考えられる[16]。

以上で述べた期待に関する「しか」の意味特徴をまとめると、以下の二点になる。

(31)a.「しか」は他者に期待があることを示し、期待される要素はとりたてる要素より発話者が作り上げた序列上、上位の要素となる。

b. 自者に対する評価は必ずしも否定的とは限らない。また、他者に対する評価は必ずしも肯定的とは限らない。つまり、否定的か肯定的かは文脈による解釈の問題である。

4.まとめ

本稿では「だけ」と「しか」の違いについて記述した。まとめると、以下の四点になる。

Ⅰ「だけ」と「しか」はいずれも「X が P する」「X 以外 P しない」という二重の意味構造を持っており、構文的に自者は明示され、他者は暗示される。しかし、両者における二つの意味の生成プロセスが異なるため、「だけ」は「X が P する」が明示され、「X 以外が P しない」が暗示されるが、一方、「しか」は「X 以外が P しない」が明示、「X が P する」が暗示される。

Ⅱ「だけ」と「しか」は、それぞれ、「X が P する」「X 以外が P しない」の両意味における重点の置き方が異なる。つまり、「だけ」は、「X が P する」「しか」は「X 以外が P しない」を表すのに重点が置かれている。

Ⅲ　期待という概念は、「だけ」「しか」の両方に見られる。ただし、「だけ」は期待に対して任意的であるため、それに左右されず成立する。一方、「しか」は自者への期待は任意的であるが、他者に関しては必須的であるため、他者に関する期待がない場合には成立しない。

Ⅳ「しか」には、自者より他者に期待があることを示す働きがある。その期待は、現実世界における価値観とは必ずしも一致しない。従って、実際に期待がなくても、「しか」が現れることによって、文脈上、他者への期待を持たせる解釈が生じることがある。

なお、日本語において「限定」の意味を表すとりたて詞には、「だけ」「しか」以外に「ばかり」がある。そしてこらら３つの形態はいずれも「X が P する」「X 以外 P しない」の意味を表している。「ばかり」を含めた三者による「限定のとりたて」の仕方については今後の課題とする。

＜註＞

[1] 「期待」という用語は研究者によって「予想」（寺村 1991、沼田 1993）、「予測」（山中 1993）、「前提」（伊藤 1996）などとも称されている。

[2] 構文論的な観点から、「しか」と否定表現との共起をめぐる条件については、Muraki(1978)、Kato(1979)、許斐(1989)、久野(1999)などに詳しく論じられている。

[3] 「表の意味」「影の意味」を、寺村(1986)では、それぞれ「コト的意味」「影（の意味）」と称している。

[4] 以下、「P する」「P しない」という表記はそれぞれ「P だ／である」「P でない」も含める。

[5] 沼田(1986)は、とりたて詞の意味を、「主張・含み」「断定・期待」「自者・他者」「肯定・否定」という４組８個の概念で記述している。ただし、沼田(1988)以降、「期待」は「予想」と修正されている。

[6] 「予想」の「自者否定」「他者否定」について詳しいことは次の３節で述べる。ただし、本稿では、「予想」を期待と称していることに注意されたい。

[7] 「コト的意味」とは「文から伝える外界の客観的な事柄」に関する意味であり、「影（の意味）」とは、「その文から聞き手が感じ取ることで、言外、つまり文外に暗示」される意味であるとされる(寺村 1986:258)。また、寺村(1991)では「表の意味」「影の意味」として称されている。
[8] 沼田(1986)では、「とりたて詞は、それがない文を明示的主張―主張―として意味すると同時に、ある他者に関しても何らかの意味を暗示的主張―含み―として表す。」(p.121)と記述されている。
[9] 本稿における「だけ」「しか」の意味記述は沼田(1986)の用語に従っている。よって、「しか」による「X 以外が P しない」の意味は「他者肯定」となる。
[10] ただし、「視点」という観点から、沼田(1993:53-55)では「だけ」は自者中心、「しか」は他者中心であると指摘されている。
[11] 森田(1980)、佐藤(1986)、寺村(1991)、井島(1992)、山中(1993)、沼田(1993)、伊藤(1996)など。
[12] 山中(1993)では、「だけ」は「その文脈で問題となっているカテゴリーの否定と肯定の対立の中で、話し手が明確に囲い込み、意識しているほうのカテゴリーを明らかにする」(p.86)ことが使用目的であるため、次の例①のように、発話以前の期待が満たされなかった時に起こる感情を表す「残念だ」とはなじまないとする。
① A：じゃ、アルコールは、何を飲むかね。B：僕は、ビールだけ飲みます。A：#そうか、ビールだけ飲むのは、残念だね。（山中(1993)における#は文脈から不適切な文を表している。筆者註。）
たしかに、「だけ」は限定の機能が優先されてはいるものの、発話以前での期待には開放されており、期待の有無によって文の自然さは変わらない。また、①の文脈でも②のような期待が想定可能であるし、③のように「残念だ」という期待はずれの気持ちを表す表現と共起できないこともない。つまり、「だけ」においても、成立した自者に比べ、成立していない他者に対する「残念だ」という気持ちが表れ得る。
② ＜ビールよりワインの方がおいしいのに、あるいは、ワインの方がもっといいのに＞
③ 今年の「土地白書」では、定期借地権制度について「幅広い活用のための方策を検討していくことが重要」と述べているだけで、具体論に踏み込んでいないのは残念だ。(中日新聞 990607)
また、森田(1980:173-174)、沼田(1993:47-48)にも、「だけ」における期待は認めていないと思われる。
[13] ただし、沼田(1993)では次の例①が不自然となることから、「しか」には他者以外、自者が成立することへの期待があると説明している。しかし、例①が不自然となるのは、例②のように、そもそも突発的な出来事を表す「ひょっこり」「突然」などが否定文に表れにくいため、「しか」の文とはなじまないからであると考えられる。
① ひょっこり昌が現れた。／* ひょっこり昌しか現れなかった。
②* ひょっこり昌が現れなかった。／* 突然、雨が降らなかった。／* いきなり花子が泣かなかった。
つまり、①の不自然さは、「しか」がもつ「昌が現れる」という「予想」と予想外の出来事を表す副詞による意味的なぶつかりに起因するものである、というわけではない。また、吉田(1998)にも本稿と同様な指摘が見られる。
[14] とりたて詞における「序列」は従来から「も、でも、さえ」などの研究で指摘されているが、本稿では「しか」についても「序列」の概念を用いた。ただし、後述するように、数量表現をとりたてる場合、期待される要素がとりたてる要素より多量であるという指摘は見られる。しかし、本稿における「序列」とは数量表現に限られるものでなく、また、世間一般での価値観によるものでもない。
[15] 数量表現において、自者より他者が多量であるという指摘は、佐藤(1986)、沼田(1986)、山中(1993)にも見られる。
[16]「しか」が肯定的な文脈にも使用できることに関しては、山中(1993)でも指摘が見られる。ただし、山中(1993)は、期待とは発話以前からの前提であるとしているため、本稿における発話された事柄からの判断という立場とは異なると思われる。

＜参考文献＞

井島正博(1992)「限定表現の多層的分析」『紀要　文学科』69、中央大学文学部

伊藤智博(1996)「限定のやり方－「だけ」と「しか」－」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター』22、
久野暲(1999)「「ダケとシカ」構文の意味と構造」『言語学と日本語教育』（アラム佐々木幸子編）くろしお出版
許斐慧二(1989)「「しか～ない」構文の構造」『英語学の視点』（大江三郎先生追悼論文集編集委員会編）九州大学出版会
佐藤恭子(1986)「「しか」と「だけ」の用法－名詞に接続する場合－」『日本語・日本文化』13、大阪外国語大学研究留学生別科
寺村秀夫(1986)「「前提」「含意」と「影」」『論集日本語研究（一）現代編』明治書院
_____(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
中西久美子(1995)「シカとダケとバカリ」『日本語類義表現の文法（上）単文編』（宮島達夫・仁田義雄編）くろしお出版
沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』（奥津敬一郎・沼田善子・杉本武）凡人社
_____(1988)「とりたて詞の意味再考－「こそ」、「など」について－」『論集ことば』（『論集ことば』刊行会編）くろしお出版
_____(1993)「「少しだけあるから」と「少ししかないから」」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究』平成4年度筑波大学学内プロジェクト研究成果報告書
森田良行(1980)『基礎日本語』2、角川書店
山中美恵子(1993)「限定と否定」『日本語教育』79、 日本語教育学会
吉田和史(1998)「だけ、しか、Only」『言語の普遍性と個別性に関する記述的・理論的総合研究』(平成7年度～平成9年度文部省科学研究費補助金・基盤研究(B)(2) 究成果報告書) 筑波大学
Kato,Yasuhiko.(1979) " *Sika nai* construction and a theory of Binding", *SOPHIA LINGUISTICA* 5、上智大学
Muraki,Masatake.(1978) "The *sika nai* Construction and Predicate Restructuring" *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha